



マンガへの架け橋

ちばてつや

子どもの頃、ボクたち家族は中国東北部、いわゆる満州で暮らしていた。

父が印刷会社で働いていた関係で、紙の切れ端がたくさん手に入った。

それらは「捨ててしまう」という意味だったのだろうか「ヤレ紙」と呼ばれていたが、絵を描くことが好きだったボクにとっては、とても大切な遊び相手、宝物だった。

紙の大きさを調節する為か、ヤレ紙は大体がし字の形をしていたが、まれに大きくて、形の良いものを見つたりすると、とても嬉しかったことを今でも覚えている。

終戦を迎え、日本に引き揚げなければならなくなり、本当に必要な最低限の荷物を選ぶときも、何度も読み返してボロボロになった数冊の童話集と、この「ヤレ紙」だけは、なんとか小さなリュックの底に詰め込んだ。

その日本への帰路の途中、父の親友だった中国人にかくまってもらった時、寒くて狭い屋根裏で、退屈してむずがる弟たちに絵を描いてやり、読み聞かせをしたのもこの「ヤレ紙」だった。

馬に羽を生やして空を駆け回らせてみたり、想像を巡らせ、色々工夫しながら描いたその絵を「続きはどうなるの?」と心待ちにしていた弟たちは、思えばボクが一番最初の読者だった。

帰国後、高校生になったボクは、貧しかった家族の長男として、何とか家計を助げたいと思い、色々なアルバイトを渡り歩いたが、なかなか上手くない。さんざん迷った末に、何とか仕事になったのが、終生続けてこられた「マンガを描く」ということだった。

当時は貸本文化がそろそろ斜陽を迎えようとする頃だったのだが、まだ神田のあたりでは小さな出版社が教社営業していた。

そのうちのひとつ、「日昭館」という



ちばてつや ● 漫画家。東京都生まれ。日本大学第一高校卒業。1941年家族で奉天(現中国・遼寧省瀋陽)にわたる。46年に引揚げる。56年プロデビュー。58年「ママのバイオリン」で雑誌連載を開始。61年「ちかいの魔球」で週刊少年誌にデビュー。2012年旭日小綬章受章。14年文化功労者。18年手塚治虫文化賞特別賞受賞。「あしたのジョー」、「おれは鉄兵」、「あした天気になあれ」、「のたり松太郎」など代表作多数。20年文星芸術大学学長に就任。

出版社に持ち込んだボクの作品は、広告の裏などにクレヨンや鉛筆で描いた、素人丸出しのお粗末なものだった。

「こんな紙にそんな描き方じゃダメだよ」と、その社長がプロの原稿を見せてくれ、Gペンや墨汁を使ってもっと丁寧に描くことなど、マンガの描き方の「いろは」を教えて貰った。

そして、少しは見込みがあると思ってくれたのか、「これに何か描いてきなさい」と手渡してくれた二、三十枚ほどの真っ白な「ケント紙」。

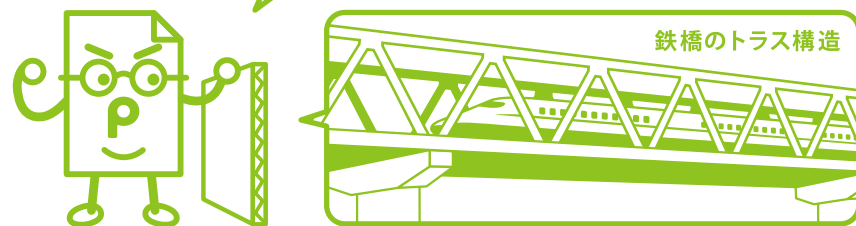
この新しい紙は、本当にまばゆい光を放っていて、嬉しかったなあ。

デジタル全盛の今になっても「紙にGペンや筆を使ってガリガリペタペタ描く」という昔ながらの作業から離れられないのは、人生の節々でボクをマンガの世界に導いてくれた、大切な宝物である「紙」への捨てがたい愛着なのかもしれない。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

隙間だらけだから、段ボールは強い。

引っ越しや収納に便利な段ボール。紙できているし、隙間があって一見頼りないのに、不思議と丈夫。実はこの隙間が丈夫な秘密なんです。「トラス構造」といって、タワーや鉄橋にも使われるほど頑丈な構造。おまけに、その隙間が衝撃も和らげてくれるんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は7月4日号、原田マハさんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

ちばてつやプロダクションにて。

Photo: Shiro Miyake